

* 人物表

久米 大吾(23) 介護士
桃山 明(71) シヤッターマン
横山 千代(71) 横山の妻
桜井 京子(24) 大吾の恋人

* あらすじ

シヤッターマン!

市川理恵

観光客で一杯の札幌時計台前に不機嫌な久米大吾(23)。あたりに響くシヤッター音と観光客の賑やかな声。大吾、大きくため息をつく。そこに、「撮りましょう!」と、ご機嫌な声とともに現れた一人のシヤッターマン桃山明(71)。自分は祖母に頼まれて時計台の写真を撮りに来ただけだ、と説明する大吾。祖母はここが図書館の時に通っていたと話すと、横山は祖母と知り合いだという。懐かしがる横山に、是非、祖母に会いに来てくれと誘う大吾。嬉しそうに大吾と共に歩き出す横山。

帰途、たくさんの笑顔が見たくてシヤッターマンをしている、という横山の話、笑顔になれないまま聞いている大吾。二人が辿り着いたのは病院。

笑顔のない病院の廊下を歩き、病室へ。部屋に入ると心配顔で待っていた横山の妻の手をとって、懐かしがる横山「五十年ぶりでも判るもんだなあ」と。伝説のシヤッターマンである横山が、既に何十回も繰り返ししているこの行動に振り回される新人介護士・大吾だが、休日に横山と過ごせた事で幸せを分けて貰った気持ちになり、本当の笑顔を取り戻す。

札幌時計台の鐘の音が響き渡る。
観光客の賑やかな声。

大吾M O 「六月も終わりそうな日曜日、梅雨
のないさわやかな札幌は観光客に大人気
で……」

シャッターマンたちの「撮りますよー。
ハイ、チーズ！」という声が、色々な
場所から聞こえる。

そして、シャッターを切る音。
「ありがとうございますー」という
若い女性の声。

大吾M O 「札幌市ボランティアの方たちが写
真を撮ってくれるサービスは大活躍だ。
良い事だよ、そう、それに関しては自分
だって何にも文句はない。むしろ、生ま
れ育ったこの町の素晴らしさを伝えてく
れる人たちに感謝している……けど」

携帯電話の着信音。

大吾「もしもし……」

京子「ちよつと！ ひどくない？ ね、酷い
よね！」

大吾「ごめん京子ちゃん！ 必ず埋め合わせ
はするからさ、次の休みは必ず、京子ち
ゃんと」

京子「次って、いつ？」

大吾「え？」

京子「大吾、就職してからここ三ヶ月、おや
すみあった？」

大吾「……なかった、よなあ」

京子「そうよ、なかったのよ、ちゃんとした
お休み。だから今日が記念すべき初めて
の、第一回目の、正真正銘の、大吾のお
休み！」

大吾「そう、そうだよ！ ホント、そうなん
だよなあ」

京子「だから私も無理して大吾にあわせて、
夜勤と代わってもらって時間、あけたの
に」

大吾「ありがとう、ホント、ありがとね、京
子ちゃん」

京子「ほら、ほらね、そういうとこ。調子よ
すぎ。御人好し過ぎ！ だから初のお休
みなのに、頼まれるのよ、断れないのよ、
約束してたのに！」

大吾「だから約束は次のとき必ず……」

京子「もう、いい！ 二度と期待しない！」
大吾「だからこの次は必ず京子ちゃんと……」

……

携帯電話が切れて不通音が流れる。

大吾「（大きいため息）……終わったな、こ
れで」

横山「お兄さん！ 撮って差し上げましよ
う！」

大吾M O 「顔を上げると正面に、シャッター
マンの上着を着た屈託ない笑顔の男が、
立っていた。その上着、明らかに他の人
たちより年季が入っているが、そのこと
がより一層、この男の誇らしげな印象を
強くしていた。そして、そのことが機嫌
の悪い僕をより一層、腹立たしくさせた。
そしてそれは僕の、顔にもはつきり、出
ていたと思う」

横山「ほら、お兄さん、そこ、時計までちゃ
んと入れてあげますから」

大吾「いえ、結構です」

横山「いやいやなんも、私はシャッターマン、
ながーくやってる横山明いう者です、な
んも怪しい者では」

大吾「いえ、シャッターマン知ってます、地
元なんです」

横山「あ、そうですか、地元の方でしたか」

大吾「今日はちよつと、祖母に頼まれた
だけで」

横山「でもほら、ちゃんとしてそんなにカメ
ラ、手に持ってるじゃないですか」

大吾「はあ、でも時計台を……」

横山「笑顔になれますよ」

大吾「え？ 笑顔？」
横山「カメラ向けられるとね、人間って自然
に笑顔になるんですよ」
大吾「いや別に笑顔、今、ならなくても僕は

……」

横山「いやあなんかさつき、とんでもなく悲しい顔、してたからね、お兄さん」

大吾「え？ 悲しい顔……まあ悲しいとか、悔しいというか」

横山「いやだから、そんな時こそシャッターマン！」

大吾「……そんな時こそって」

横山「悲しい時でも笑ってみると……」

大吾「一人で笑ってるのも、変だと思いが」

横山「(豪快に笑い) それも、そうだなあ」

大吾「……そうです」

賑わいの中に、かすかに流れる『時計台の鐘』の歌。

横山「(音楽に合わせて口ずさむ) とーけいーだいのーかねがーなる」

また、賑わいの中に消えてゆく『時計台の鐘』の歌。

横山「いやあ、知らないですよね、この歌。若い人は」

大吾「知ってますよ、祖母が時々、口ずさんでいましたから」

横山「へえ、おばあさんが」

大吾「ここがまだ図書館だった時に、よく通っていたそうです」

カメラの電源を入れる音。

大吾「どれだけ時間が経っても、大事な思い出は色あせない、らしいです。若いので、わからないですが」

シャッターを切る音。

横山「あつ……じゃあせつかくとするならね、お兄さん、ここ、ここにきてよ」

観光客の賑わう声の間を、「失礼しますよー」という横山の声。

大吾と横山の急ぎ気味の靴音。

横山「ここですよ、ここ。」

窓ガラスを静かに指先で叩く音。

大吾「窓？ 窓ガラスですか？」

横山「そう、窓ガラス。これね、ずーっと変わらないうです」

大吾「ずっと？ 祖母の頃から？ だとすると五十年は経っているってこと、ですね」

横山「五十年以上、ですよ」

窓ガラスを静かに指先で叩く音。

横山「ここから中、撮ってごらん、お兄さん」

大吾「ここ、ですか？ 窓から中を？」

横山「そう、窓ガラスにしっかりカメラくっつけて……」

窓ガラスにレンズをつける音、そしてシャッター音。

横山「五十年か……」

大吾MO「窓ガラス越しに中を見つめる横山さんの目に映っているのはたぶん、今現在ではない、それが僕にも、わかった。レトロに歪みのある窓ガラスから覗く室内は、まるで五十年も百年も前の世界のぞき見ている様だった」

横山「五十年以上前だけだねえ、そうだな、戦後十年と少し、経った頃だから昭和三十二、三年くらいだったかなあ」

大吾MO「そうつぶやくと横山さんは、一人で思い出の世界に入って行った」

観光客たちの、賑やかな周囲の音、FO。

横山「そうだ、春の匂いがした。昭和三十三年、やっと春の匂いがしてきた頃だった

年、やっと春の匂いがしてきた頃だった

年、やっと春の匂いがしてきた頃だった

年、やっと春の匂いがしてきた頃だった

年、やっと春の匂いがしてきた頃だった

年、やっと春の匂いがしてきた頃だった

なあ」

静まり返った室内に、本のページをめくる音と、鉛筆を走らす音だけが響く。

横山「その頃、戦争終わって十年経ってても、欲しい本が今みたいに簡単には手に入らなかったから学生はみんな、図書館を頼ったんだよね……ま、あとは、女学生と並んで勉強できるのも、ドキドキだったなあ、それは今の若いのと、かわんないな(笑)」

鉛筆の音と本のページめくる音が静かに響く中、かすかに聞こえる女性のハミングする声。

少しざわめく室内の人々。

女性のハミング、少し大きくなる。

なおざわめく、室内の人々。

カタン、と椅子が動く音。

中年女性の、注意を促すような咳払い

が響き渡ると、次の瞬間、無音になる。

そしてまた、鉛筆を走らす音と、本の

ページをめくる音だけが響く。

横山「もう、こっちのほうはハラハラしてしまつてさ、その女学生の度胸の良さと言うか、マイペースぶりというか……」

静寂の中、またもや聞こえてくる女性

のハミングする声。

ざわめく室内の人々の声。

ハミングの声、それは間違えなく『時計台の鐘』のサビの部分で、気持ちが入っているのかどんだん女性の声は大きくなる。

椅子を思い切り動かす音と同時に、憤りを隠せないような女性の靴音が響く、その音、どんだん速く、近くなる。その音を遮るような、少年の大笑いする声。

横山「(笑う) ホント、こっちがあわてるこ

とないのに、何かしなければいけないと思つて、とりあえず大声で笑つてみたの

さ(笑)」

大吾「……横山さんが？」

横山「だつて、その歌を口ずさんでる女学生は楽譜を書くのに必死で、それも幸せそうな満面の笑みでね、図書館の司書さんが怒っていることに気づきもしないわけさ(笑)」

大吾「楽譜を、書いてたんですか、その女性」

横山「そうなんだね、歌いながら楽譜を書いてたんだ。『時計台の鐘』を、音楽学校の試験で歌うつて言つてさ、何でも、演奏会でその歌を聞いて、えらく感銘をうけて、自分も歌いたくなつた、つてね」

大吾「その方、行かれたんでしょうかね、音

楽学校」

観光客たちの賑やかな声。
ドアの開閉音、館内から『時計台の鐘』の歌が流れてくる。

横山「行つたんだ、しばらく経つてね。行く時にわざわざ僕の事を捜しに来てくれて、図書館の司書さんに叱られる所を助けてくれたお札に、つて、楽譜書いてくれたんだ私の分まで。それで、行つてしまった。今でも、宝物。いや、お守りみたいなものでね」

折り畳んだ紙を、ゆっくり丁寧に開く音。

大吾MO「横山さんが胸ポケットから出し、丁寧に広げた紙には『時計台の鐘』の譜面が描かれていた」

横山「音符なんて読めないから私、わからないといったんだけれど、その人は幸せそうな笑顔で言うんだよね、『歌は読むものではないんですよ』つて」

大吾「読むもの、ではない？」

横山「『歌は歌う物』だつて。歌う方が先だつて。歌っていれば、音符が歌になつて見えてくるつて」

大吾「歌になつて、見えてくる、か……」

横山「ちよつと、ご覧になりますか？ くれ」

紙をゆつくりと広げる音。

大吾「あつ、どうもありがとうございます」
横山「言われてみれば、なんか、歌が聞こえてきそうな譜面でしょう？ 音符、未だに読めませんが、なんとなく時々、これを見ながら歌ってしまうんですよねえ。あの時の女学生の幸せそうな笑顔に、洗脳されてしまったんだねえ(笑)」
大吾「あれ？ ここに書いてある名前、これって」

紙を手渡す音。

横山「ああ、これがこの、譜面を書いてくれた女学生の名前です」
大吾「その、図書館で歌っていた女学生ですか？」
横山「そうそう、歌が全てって感じの、幸せそうな女学生です」
大吾「祖母です」
横山「え？ 祖母？」
大吾「はい。祖母です。おばあちゃんです」
横山「おばあちゃん……ってことは、お孫さん？」
大吾「はい。時計台の写真をおばあちゃんに頼まれた、孫です」

横山「(大笑い)」

観光客がざわめく中、横山の大きな笑い声が響く。

大吾MO「周囲の人たちが一瞬、動きを止めるほど、大声で横山さんは笑った、これ以上の幸せがない、人生で初めての幸せだ、というくらいに、嬉しそうな、楽しそうな顔で」

横山「(笑)いやあーなーって嬉しい日だね、今日は」

さらに高らかになる横山の笑い声。

大吾MO「僕は、横山さんが幸せそうに笑えば笑うほど、どんどん、悲しくなった、悲しくなった顔に気が付かれないように、あわてて時計台の写真を、立て続けに、撮った」

シャッター音が数回、続いてなる。

横山「あつ……もう少し右から撮った方が、空まではいる」

大吾MO「そう言って横山さんは、僕にカメラを貸すよう促し、自ら時計台を撮り始めた」

シャッター音。

横山「譜面のお礼だ、だいぶ、遅くなっちゃったけれどなあ……緊張するなあ、あの女学生に見て貰うことになると思うと……」

シャッター音。

大吾「あの、よろしければ……いらつしやいませんか？ 祖母に会いに」

横山「え？ でも、そんなに……覚えていらつしやるかどうかさえ分からないですよ」

大吾「いえ、でも、喜ぶと思うんです」

横山「いやあ、図々しくないかい？」

大吾「こちらこそ、なんか、突然で申し訳ないですが」

横山「いやいや……え、ホントに？」

大吾MO「そういうと横山さんは、他のシャッターマンさんのところへ駆け寄り、嬉しそうに事情を話していた。話をされたシャッターマンさんは、僕を見て、軽く会釈してくれた。僕はその方に、深く、長く頭を下げた」

行きかう人々のざわめきと、たくさんの車が通り過ぎる音。

大吾M O「明らかにしやぎ過ぎの横山さんは、行きかう人たちと時折ぶつかりそうになりながらも、話すことをやめなかつた」

横山「大吾君、仕事は？」

大吾「え？ 僕は……福祉関係の」

横山「へえー福祉関係か。偉いねえ。大変なんだでしょ？ 休みもなくて重労働だって、テレビのニュースでよく聞くけど」

大吾「ん……そうですね、その通りです、休みもなく」

横山「休みなく、かあ。でも、困っている人の役に立って、笑顔になってもらえる仕事だもんなあ、やりがいはあるでしょ？」

大吾「笑顔に？ 笑顔になって貰えてるんでしょうか」

横山「大吾君が、笑顔でいたら、大丈夫ですよ」

大吾「僕が笑顔か。そっちの方が、自信ないです。笑顔になれてない気がします」

横山「(笑) さつきも、この世の終わりみたいな顔、してたしね。仕事は色々、あるからねえ」

大吾「あ……あれは、まあ」

横山「なんだ、仕事じゃないのか？」

大吾「ま、仕事の事でも、あるんですけど」

横山「(笑) あっ、彼女か？ 彼女と喧嘩か

な？」

大吾「……仕方がないです、まだ新人ですから仕事優先です」

横山「今度、いらっしやいよ」

大吾「え？ 今度？」

横山「彼女さんと二人で時計台までいらっしやいよ」

大吾「二人で、時計台に？」

横山「そうさ、二人で一緒に。私がシャツタ、押してあげるから」

大吾「え？ いやあそれは……」

横山「私がカメラ向けると、どんなに喧嘩してる人たちでも、ちゃんど、仲良くならんだから」

大吾M O「自信満々の笑顔を空に向け、シャッターを切る真似をする横山さんを見て、僕はもつと悲しくなり、思わず目をそらしてしまった」

自動ドアの開閉音。

たぐさんの人の、ざわざわとした話声。「患者番号三十五番の方、お会計できています」という受付嬢のアナウンス。「伊藤先生、伊藤先生、外来三番までお願いいたします」という放送。

横山「病院って……病院にいるのかい？ ど

つか、わるくしてるのかい？」

大吾「……まあ、ちよつとだけ……」

横山「そうか、そうでしたか……」

大吾M O「病院といっても、正確に言うの特
別老人ホームが併設された、病院で……」

前方からステンレスの院内ワゴンが近づいてくる音。

京子「あつ、大吾」

大吾「あ……京子ちゃん、あれ？ どうして、仕事？」

京子「見えての通り、勤務中です」

大吾「だって今日は、休みをとったって」

京子「休んでもすることないので、一人だと」

大吾「……すみません……ほんと、ごめん」

横山「(咳払い) ちよつと、大吾君、この方があの時の図書館で歌ってた女学生じゃないよね(笑)」

京子「(笑) 歌ってませんよ、図書館では。桜

井京子と申します、ここで看護師をしていて、大吾君にはいつもお世話に……いえ、お世話してます(笑)」

大吾「ちよつと京子ちゃん」

京子「だってそうでしょ？ 大吾君はいつも仕事ばかりで、他の事は何にも頭のないみたいで、心配を通り越していつも、怒

ってます私」

横山と京子の笑い声が響く。
院内のおしゃべりの声、一瞬静かになる。

横山と京子の豪快な笑い声。
再び静まり返る院内。

横山「ご無沙汰しております、横山明です、あの、五十年くらい前に『時計台の鐘』の譜面を頂いた、横山明です」

大吾「(咳払い)あの、ここも図書館と同じく、大声は出さないようにしてください」

京子「あつ、なんかやな感じー。なんで私が大吾君に怒られるのかわからない」

大吾「怒ってるんじゃないでしょ？ ほら、患者さんたちがみんな見てるし……」

横山「京子さん、こんど大吾君と一緒に時計台にいらっしやい。このシャッターマン横山が、写真を撮ってあげますよ」

大吾MO「横山さんはシャッターマンと書いてある上着の背中を誇らしげに京子に見せ、嬉しそうに笑った。それを見て僕は、そして京子も、少しだけ涙ぐんだ」

京子「えっと……お願いします、今度、是非」

横山「任せておきなさい！ 私がカメラを向けると、必ず笑顔になって、仲直りできるから」

京子「(笑)では、ずーっと、シャッターマンでいて下さいね。たぶんずーっと、喧嘩してるので、私と大吾君」

横山「もちろん！ 私は今も昔もずーっと、シャッターマンですからね」

大吾MO「院内の人たちにどれだけ視線を向けられても、今度は僕も、何も言う気になれなかった。それは悲しかったたら、だけではなく、少しだけ横山さんのすこさに気が付いて、尊敬したからだ」

静かな廊下に響く、二つの靴音。

横山「静かですねえ、病院は嫌だね」

大吾「いや、ですか？」

横山「いやだよ、それは。笑いが無い、笑顔もない、思い出も……ない」

大吾「……そう、ですね」

一つの靴音が止まる、と、もう一つの靴音も止まる。

大吾「ここ、です。かつての女学生」

横山「うわあ緊張する。ちよつと大吾君、私の襟、曲ってないかい？」

大吾MO「僕が『大丈夫ですよ』という横山さんは、安心したように病室の扉をゆつくり、開けた」

ゆつくりとドアが開く音。

大吾MO「お辞儀をしたまま、何度も自分の名前を繰り返す横山さんの背中を僕は、じっと見つめた。上着の背中にある『シャッターマン』の文字が、ヒーロー戦隊物の正義の味方みたいに、光って見えた」

千代「まあまあ、こちらこそご無沙汰いたしております、お顔をお上げになって下さい、ね？」

横山「どこか、お悪いんですか？ こんなにお元気そうなのに、どこも、悪いようには見えない……」

千代「ええ、家族が心配性なだけで、別に何も、治療するところは、ないんですよ」

横山「いやあそうでしょう。いや、ホント、よかった……よかった、よかった」

大吾MO「よかった、を何度も繰り返しながら、横山さんは奥さんに、胸ポケットから大事そうに出した古い譜面を、見せていた」

シャッター音。

横山「あれ？ 大吾君？ 今、撮った？ 撮ったよね、写真」

千代「まあ、写真を撮られるなんて何年ぶりかしら？」

シャッター音

横山「(笑)いやあ照れますねえ撮られる方は」

千代「(笑)本当に。照れますねえ」

大吾MO「二人の笑顔は、五十年ずつとお互いに思い続けてきた積み重ねの結果みたいな、人生で一番幸せな時みたいなの、そんな笑顔だった。もう、この病院に入っ

てから、何十回と繰り返している横山さんの、この病院の伝説みたいな徘徊行動なのに、二人は本当に『人生初の、一番の幸せな時』みたいなの、お互い笑顔で見つめ合い、笑い合っていた」

横山「いやあ貴女にあの時、『歌は歌う物、読むものではありません』ってね、譜面読めなくてもいい、と言われて、なんとなくその気になつて(笑)」

千代「たたくさん、歌ってしまった人が勝ちですもの」

横山「図書館の司書さんに叱られてもね(笑)」

千代「叱られました？ 私」

横山「(笑)いえいえ、大丈夫でしたよ」

千代「(笑)そうですね、助けて頂いたのですもの」

大吾MO「一番の幸せを、何度も初めてののうに体験できる、そんな、神様からのプレゼントみたいだと僕は少し、二人がうらやましくなった」

横山と千代の笑い声。

ドアの開く音。

京子「失礼いたしますー」

大吾「京子ちゃん……あれ？ 何それ」

京子「じゃじゃーん！ なんと、昔、横山さ

んが撮られた時計台の写真が引き伸ばされてこの病院にありましたー！」

千代「あら！ すごい！ 有名な写真家さんでいらしたのね(笑)」

横山「いや、有名な写真家、ではなく、僕は今も昔も、シャッターマン！ ですよ」

大吾、横山、京子、千代の笑い声。

横山「ほらお二人さん、並んで」

大吾「えつ二人で？ みんな一緒に撮りましょうよ」

横山「大吾君、君も察しが悪いよ、何のために京子ちゃんがこんな重たいの運んだのかわからないのかい？」

京子「そうよ、そこが大吾はダメダメなのよ」

千代「そうね、今日の事は今日のうちに片づけておかないと」

大吾「えつ僕？ 僕が悪いの？」

千代「ほらほら大吾君、早く並んで」

横山「はい、もっとお二人さん、くっついてー」

京子「はい。ちゃんとかくっついてます！」

横山「はい、にっこりねえ、大吾君、返事は？」

大吾「あ……はい、こんな、感じで？」

横山「かたいかたいよ、ほら、今日はいいい休日だったでしょ？ 京子ちゃんと仲直り

できて、おばあちゃん孝行が出来て」

大吾「……はい。ほんと、本当に」

京子「調子いい事いちゃってー(笑)」

大吾MO「嘘ではなく、その時本当に、今日が休みの日でよかったと思った。仕事の日ではなく、休みの日だったから、素直に横山さんと、過ごせたのかもしれない」

横山「大吾君、そりやあちよつと、笑い過ぎだ(笑)」

大吾「(笑)なんか、いやほんと、すごく楽しい、休日でした！」

京子「私も！ とっても楽しい休日でした！

大吾と一緒に！」

横山「あれ？ なんかおのろけだなあ(笑)」

大吾、横山、京子、千代の大きな笑い声。

横山「とけーだいー！ で、撮るよ、せーの」

大吾・京子「とけーだいー！」

シャッター音。

(了)